

三 大正十年九月十一日、口演会のこと

吉永村の鶴無ヶ淵尋常小学校で口演したのは、大正十年九月十一日、小波五十二歳の時です。

その前に、大正十年の小波の年譜をみてみます。

大正十年（一九二一）

二月 小波が二回にわたって口演をしたので、そのお礼に、皇后陛下から「牙彫乗馬人形」を賜る。（これは小波が、馬の玩具等を集めていたから、それが知られて賜ったのです）

六月 『小波世間噺』が日本書院から刊行。

小説『こがね丸』刊行三十年にあたるので、『三十年目書き直しこがね丸』を博文館から刊行。

『こがね丸』発表三十年を迎へ、帝国劇場と芝紅葉館にて、『お伽三十年祭』が催され、島崎藤村・小川未明・鈴木三重吉・木村小舟・久留島武彦・西条八十・北原白秋・与謝野晶子らにより、『童話選集お伽の日本』が、博文館から刊行され、小波に献ぜられ、更に有志から木彫立像を贈られた。

大町桂月『お伽文学の開祖・三十年目書き直しこがね丸』が博文館から刊行され、小山内薫、中村吉蔵、島崎藤村ほか多くの人々が「当時の感想」を記している。

七月 文部省にて、「国語調査会」が設立され、委員に任命される。

八月 『山から海へ』の俳句紀行が博文館から刊行。

九月 富士山麓の寒村から信州地方へ口演旅行。

『新しい奥さま』博多成象堂から刊行。

十月 尾張・三河地方（愛知県）口演旅行。

十一月 北陸地方へ口演旅行。

十二月 再び尾張地方へ口演。

（巖谷大四著『波の跫音』を参考にしています。）

実に多忙な文学活動をしています、特にこの年は、児童文学の先駆けになった『こがね丸』発刊の三十年目にあたり、児童文学者が、小波に改めて敬意を表し、二つの劇場で花を咲かせた年です。その上、

国の国語調査会委員としても認められ、まさに小波の人生のなかでも、最も脚光と賞賛を受けています。

この超多忙な小波が、よくぞ吉永の地に来てくれたものと、あらためて感慨深いものがあります。

後述の特別寄稿「小

波と父多三郎」に小林

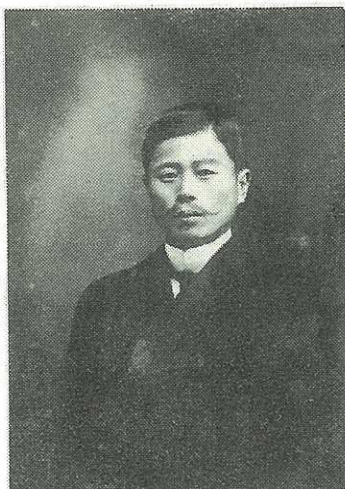
笑子氏は、小波先生を

招くのに、間門町二七

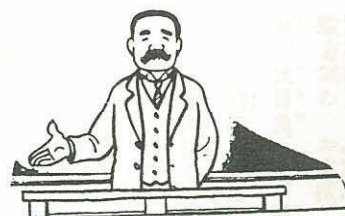
七一二（現・山本達典

氏宅・屋号油屋）山本

多三郎氏によるとこ



朝日新聞社の記者をしていたころの山本多三郎氏



ろが大きいと言われています。と記してくれてあります。小波は、明治三十六年から、早稲田大学にて文学を教えています。山本多三郎氏もこの年早稲田大学の法律部に入学され、二人の接点がここにありました。

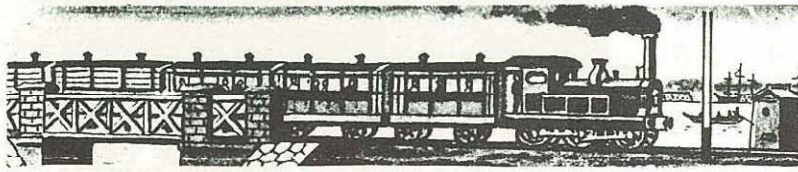
時の吉永二小の蓬生域三郎校長、須津村の稲垣禎次氏らと共に、小波先生を招くことができたのです。

九月十日、小波は国鉄鈴川駅（現・JR吉原駅）に着きました。山本多三郎氏は当時、民友新聞（現・静岡新聞）の記者をしており、山合いの村では、大学を出ている超文化人でした。その多三郎氏が、自ら馬（白馬）を引いて駅まで、恩師を出迎えました。

小波は馬に乗って、吉永の東比奈にきて、ここで穆清尋常高等小学校の五・六年生の歓迎を受けます。先生は生徒と共に小学校まで一緒に行かれ、更に小学校の前でも、児童の大歓迎の拍手に迎えられます。

当日は東比奈に泊まっています。

九月十一日、前夜の雨が小降りになってきたころ、やはり、山本多三郎氏が馬を引いてお迎えにいき、小波は馬の背に揺られながら、ゆっくりとまわりの景色を愛でつつ、吉永二小のある山道を行きました。間門の浅間神社前にて、鶴無ヶ淵小学校の上級生の歓迎のなか、駒を進めていきます。浅間神社の東側の切り通しの山



道のなかを通っていくと、峰山の微高地で平坦なところに出ます。

振り返ってみれば、駿河の海が一望でき、また伊豆の山々が見渡せる。正面には富士の山、左側には猿棚の瀑布が、昨夜来の雨により、とうとうと流れる景色に、駒を止めて、スケッチをしました。

やがて、皆の待ち受ける学校に向かいました。

その頃の学校に入る道は、狭く荷車も通れないような細い山道でした。

道の東側は、石川忠徳氏宅で、ここにも柿の古木が数本垣根のなかにあります。西側には、上山與作氏の記念碑そして学校住宅があり、桜の木をはさむように、大きな柿の木が、たわわに実をつけていました。

馬に乗られていた小波は、柿の枝に帽子をとられないようにかがめた折に詠んだのが、

「鞍に伏し 柿の下行く 小路かな」
の俳句です。

児童・父兄五百人が待ち受けるなか、学校に入ってきました。その時に歓迎の看板「巖谷先生講演会」を書いたのが、小学六年生勝又よしゑさんです。（現在は富士岡二九八、吉村よしゑさん）

下の穆清小学校からも上級生が聴講に来ています。

当日の演題は、「正直正兵衛と小猿橋」です。校務日誌によると、次のように記されています。

「正兵衛、正直にして慈愛に富む。幼なき猿を拾い来りて

養育す。猿その恩に感じ、この一家の災厄を救う話で、禍い転じて福となすと、因果応報の理をお伽噺しの中にとり、表情に富める容顔、声調人を魅了し終らずんば拍手鳴り止まず、満堂先生あるのみにして、他に人あるを見ず。

実に日本一の名に恥じざるものというべし。口演時間約四十五分間、喝采裡に閉会を告ぐ。

休憩中、本校お伽文庫の企てお伽会の山本まきの創作お伽噺を激賞され、後援を与うべしとほめた。運動場にて記念撮影を行う。また、猿棚の瀧の美景に感

じて、「人瀧や猿が峙の玉簾」の句を吟じたり。本校にその筆蹟を乞いて記念とす。となつています。

その折、児童の五・六年生は、巖谷先生歓迎のうたをそれぞれ詠んでいます。

先生がお出で下さる話をば

うそかと思う人もあるよう

六年 勝又かおる



口演中の巖谷小波
(日本児童文学大系 1. 巖谷小波)より

夢にてもさめずあれかし田舎にて

日本一のはなしきくとは 六年 勝又芳枝

いなかまで話たまはる先生の

高きみ姿あおぐ今日かな 六年 鈴木つる子

ここまでも噺しに来て下されし

巖谷先生ありがたきかな 六年 鈴木ふみ

忙しきうちくりかへて田舎まで

話下さる巖谷先生 六年 佐藤かつ

明日はもう指折りかぞへて待つて居も

話きくので楽よりけり 六年 鈴木くま

先生がこの学校へお出なる 六年 望月千代

私らの為にと巖谷先生は

休みもとらずに話下さる 六年 山本定子

嬉しやな日本一の先生が

お伽噺をなして下さる 六年 佐藤正子

これれない日本一の先生を

無理に願って来てもらうかな 六年 佐藤とり子

一生に二度とはきけぬ先生の

お話しきくはうれしかりける 六年 佐藤春信

お話を聞きうる僕のうれしさよ 六年 石川光雄

此の山の学校までもお話を

聞かせ下さる僕等よろこぶ 五年 木又政太郎

うれしくて言葉も外にありません

巖谷先生の話きけるので
五年 鈴木房江

あらうれし巖谷先生お話しに

お出で下さるうれしきよ
五年 山本まき

うれしやな巖谷小波先生が

山家の学校へお出で下さる
五年 宮代いよ

ああついにあの大坂を先生は

汗をしばってお出で下さる
五年 秋山友子

お伽噺は日本一の先生が

この学校へ来るはうれし
五年 山本松雄

指折りかぞへてまちし先生の

お話しよいよあすと
五年 石川きよ

先生は日本一のえらい人

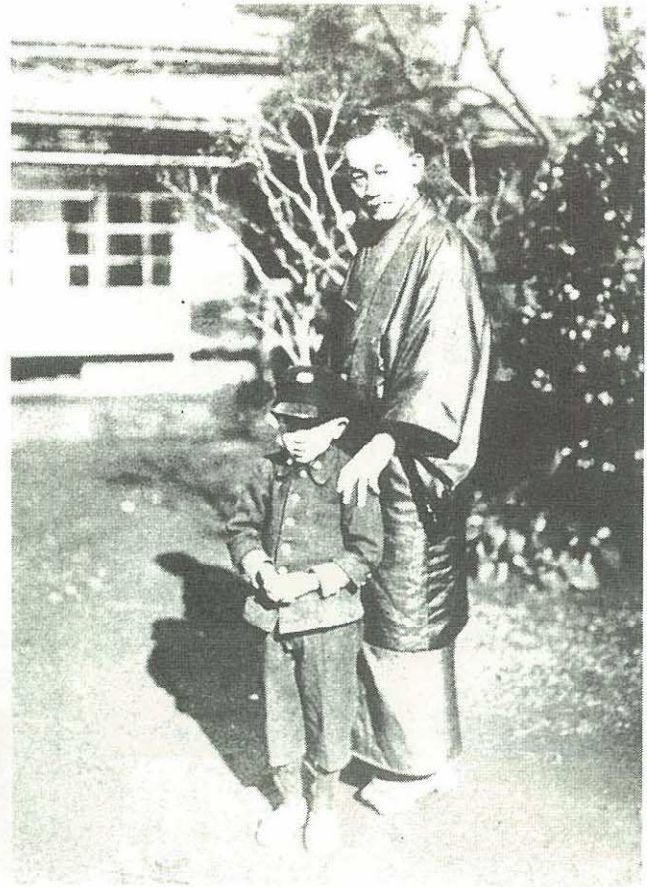
お伽噺の巖谷先生
五年 望月松枝

すばらしい歌を児童は作っています。このことは吉永二



大正10年 お伽30年記念 小波52歳

小の文化水準の高さを表しているものです。



大正11年 巖谷小波と息子の大四

小波は、その日に再び馬に乗って、吉原の旅館に泊まり、
あくる日に信州方面に旅立って行ったといっています。

当地にて、揮毫きごうされた書は、十五枚と記録されています。

小学校 「大瀧や猿が埒の玉簾」の書

間門 山本多三郎氏（現・山本達典氏）書と俳画

〃 山本傳次郎氏（現・山本秀敏氏）書と俳画

〃 鶴無ヶ渚 石川丑太郎氏（現・石川和彦氏）書と俳画

〃 石川武義氏（現・石川博康氏）書と俳画

〃 石井 鈴木平作氏（現・鈴木勝氏）書と俳画

〃 鈴木岩次郎氏 書

桑崎 佐藤清作氏（桑崎の大屋、横浜へ移転）書二枚

” 佐藤靱負氏（現・佐藤満靱氏）書と俳画

” 佐藤貞次郎氏（現・佐藤行雄氏）書と俳画

” 佐藤隆雄氏（現・佐藤嘉邦氏）二枚

” 佐藤久作氏

” 佐藤豊濟氏

この他に、東比奈町蓬生鍊二氏宅に、書と俳画の掛軸が一本あります。これは前日東比奈に泊まった折に揮毫されたものと思われます。

桑崎町は、昭和二十五年三月に大火あり、地区の大部分が焼けてしまい、小波の書もその時失っていますのが残念です。

小波お伽全集

復刻版
児童文学の開拓・確立・伸張に一代を傾倒した麻谷小波が、40年にわたる著作活動の精華を選りすぐった日本児童文学の古典。



全15巻
(千里閣版)

本の友社



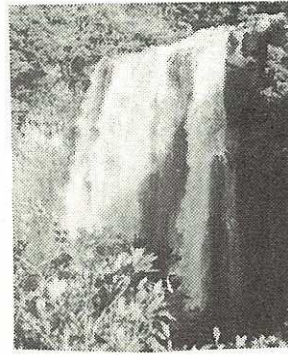
四 猿棚の句碑

小波が馬に揺られて登ってきて、猿棚の瀑布に見とれ、ス
ケッチをしていきました。それを知った蓬生校長は、猿棚
を名勝の地にすべく、小波にその意を告げると、快諾され、
ただちに

「大瀧や 猿が埒の 玉簾」

と句を作り、墨痕鮮やかに揮毫されました。

校長は、地区の有志と相談し、「巖
谷先生巡講記念句碑」の建立を呼び
かけ、たちまち纏まり、二ヶ月後に
石工事を終え、十一月十九日、第三
回お伽大会の日に合わせて、除幕式
を実施しています。



猿棚の滝

自然石 高さ百三十五cm・幅七〇cm・厚さ一二cm

表側 「大瀧や 猿が埒の 玉簾」小波

これは、小波の直筆になるものです。そしてこの字は掛
け軸に表装されて、大切に吉永二小が保管しています。

裏側 大正十年九月、巖谷小波先生巡講記念

と刻まれて、発起人と賛成者の名が彫られています。

発起人

石川 幸作 鶴無ヶ渚三七八・石川嘉邦氏の祖

稲垣 禎次 須津小教員後に須津村長

山本多三郎 間門二七七―二・山本達典氏の父

蓬生域三郎 小学校の校長・東比奈
森田 健三 小学校の訓導（教師）

賛成者

上山 與作 神戸市・鶴無ヶ渚出身石川幸作氏の兄

佐藤 清作 桑崎・現在吉原に移転

佐藤 隆雄 桑崎三七九・佐藤嘉邦氏の父

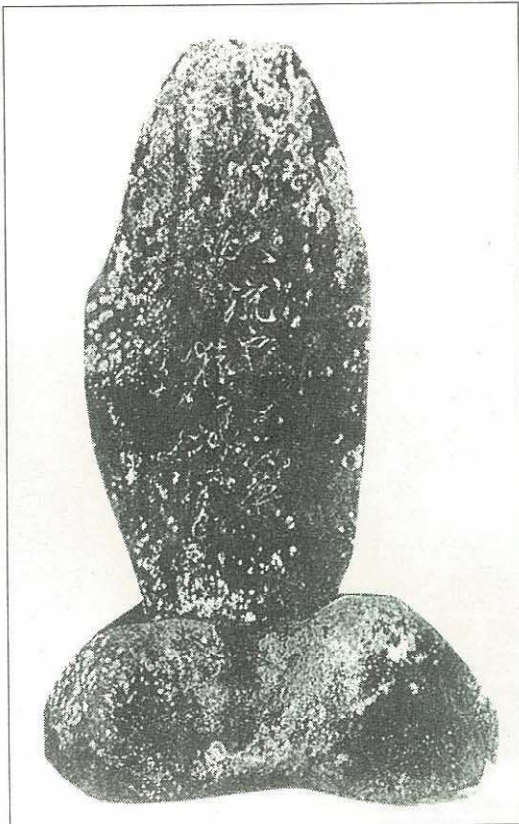
石川丑太郎 鶴無ヶ渚三八八・石川和彦氏の曾祖父

佐藤貞次郎 桑崎六一一・佐藤行雄氏の祖父

山本傳次郎 間門二九六一一・山本秀敏氏の祖父

山本 卯作 間門一九三・山本里江氏の義父

石川万次郎 鶴無ヶ渚・元板屋と称され横浜に移転



佐藤 正貴 桑崎三八三・佐藤典子氏の義父

鈴木 平作 石井七六・鈴木勝氏の祖父

鈴木 新作 石井四二・現在沼津に移転

山本勇次郎 間門・現在三倉に移転
吉永村青年団

第六支部 (間門)

第七支部 (鶴無ヶ渚)

第八支部 (桑崎)

第九支部 (石井)

石工 荻野卯之吉刻

このうちのなかには、鈴木勝氏、石川嘉邦氏、石川和彦氏の祖父の名があり、三代にわたって句碑建立にたずさわってくれています。



大正10年11月19日「大瀧や 猿が埜の 玉簾」句碑除幕
発起人及び賛同者の記念撮影